

---

資 料

---

## カンボジアでの国際保健助産学実習における 大学院生の体験

鈴木 美恵子

## Experiences of Graduate Students in International Health Care and Midwifery Training in Cambodia

Mieko SUZUKI, RN, CNM

### 要 旨

本研究はカンボジアでの国際保健助産実習に参加した大学院生の体験を明らかにすることを目的とした。実習に参加した大学院生3名を対象に、半構造的面接によりデータ収集を行い、質的記述的に分析を行った。結果、カンボジアにおける院生の体験から【カンボジアの現実を認識する】、【カンボジアの医療や看護教育を批判的に見る】、【異文化として承認する】、【カンボジアの人々に対して尊敬の思いを抱く】、【カンボジアの人々に親近感を抱く】、【日本の医療の現状や自分の生き方を問い直す】、【国際貢献への動機づけ】という7つのカテゴリーを見出すことが出来た。

院生は実習中、異文化看護と国際看護の両面の視点でカンボジアの医療現場を体験していた。実習終了後は発展途上国への関心を深め、何らかの形で国際貢献をしたいと動機づけられていた。この動機を行動化に結びつけるために、新たな授業科目設定の必要性が示唆された。

### Abstract

The present study aimed to elucidate the experiences of graduate students who participated in international health and midwifery training in Cambodia. Data were collected from three graduate students who participated in training using semi-structured interviews and subjected to qualitative descriptive analysis. A total of seven categories were identified from the students' experiences in Cambodia, as follows: "recognize the reality of Cambodia", "critical perspective of medical and nursing education in Cambodia", "acceptance of different cultures", "respect for Cambodian people", "affinity to Cambodian people", "question the Japanese medical present conditions and way of life of

---

受理：2010年12月7日

oneself", and "motivation toward international contribution".

During training, the graduate students experienced medical settings in Cambodia from the perspectives of both transcultural nursing and international nursing. Following the completion of training, students had a deepened interest in developing countries and were motivated to make international contributions in some way. These findings suggest the need to establish new courses for turning this motivation into action.

キーワード：国際保健助産実習，大学院生，発展途上国，カンボジア，体験

## I. 研究の背景

日本国内では助産学教育を大学院修士課程で行う大学が徐々に増加しており現在(平成22年4月)その数は10大学となっている。それらの大学の大多数が「国際的な視野を持った助産師の育成」を掲げて、カリキュラムに国際看護(保健)を取り入れ、海外研修を実施している。日本赤十字看護大学も赤十字の実施する国際貢献に役立つ人材の育成を目的として、平成19年度より大学院修士課程に国際保健助産学専攻を設置した。その教育目的は保健・医療・福祉の領域で実践および教育・管理ができる高度な国際的専門職業人を育成することであり、そのための授業として「国際保健助産実習Ⅰ」を設けている。授業の目的は、「1. 国際保健助産学分野の講義および演習を通して得た知識をもとに、国際的な母子保健活動の実際を学ぶ、2. 日本とは異なる国や地域の保健医療施設、教育機関での研究や見学を通して多彩な母子保健看護活動の実際に触れる、その上で、自己の課題を明確にし、将来の国際的母子保健看護活動の方向性を探究する」となっている。

平成20年度はカンボジアの保健医療制度、母子保健政策、母子保健看護活動の現状を理解するとともに、カンボジアの文化背景における女性と子供の健康の現状と取り巻く環境を知ることが目標に2週間の現地実習を実施した。この実習には今まで国際協力や開発援助の経験が全くない大学院修士課程の学生が6名参加した。

看護基礎教育において、学部生を対象に実施した国際看護(保健)学での発展途上国における実習や研修に関する実践報告はいくつかあり、実習の成果や研修の評価を報告している。しかし助産学教育における国際看護(保健)実習の

実情やその評価に関する研究は見あたらない。

そこで、本学の大学院生が発展途上国の実習を通してどのような体験をしたのかを明らかにし、今後の国際保健助産実習のありかたを検討するための資料とすることを目的に本研究を実施した。

本研究により助産学教育において国際看護(保健)実習を実施することの意義が明らかとなり、本学大学院修士課程国際保健助産学専攻における教育の充実・発展に寄与するものと考えられる。

### 用語の定義

体験：本研究において体験とはカンボジアでの実習において見たり、聞いたり、実施したりしたこと、およびその際に感じた感情や印象などをいうものとする。

## II. 研究方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン。

### 2. 実習期間

平成20年8月3日～8月15日。

### 3. データ収集期間

平成21年3月。

### 4. 研究参加者

日本赤十字看護大学の大学院授業科目である国際保健助産実習Ⅰ(以下実習とする)を選択し、カンボジアでの実習に参加した大学院修士課程国際保健助産学専攻の学生(以下院生とする)に対して、研究参加者募集のポスターを掲示して参加者を募り、それに応じて承諾の得られた

院生3名であった。

## 5. データ収集方法

実習終了およそ7か月後に、半構造的面接調査を実施した。質問の内容は「実習でどのようなことを経験し、どのように感じ・考えたか、実習後の現在、実習の経験をどのように思っているか、」などについて実習スケジュールを振り返りながら、自由に語ってもらった。調査時期を7か月後にした理由は、実習の生鮮な印象が一段落し、学業生活を送る中で改めてカンボジアでの実習体験がどのようなものであったと感じているかを調査するためであった。

面接回数は2名に対しては1回、1名に対しては1回目の内容を補完する目的で2回実施した。面接時間は1回30分から45分であった。面接内容は参加者の承諾を得てICレコーダーに録音した。

## 6. 分析方法

面接内容を文章化し、逐語録を作成した。得られたデータを繰り返し読み、実習を通して感じたこと・考えたことに焦点を当てて文脈ごとにコード化した。それらのコードの相違点、共通点について比較し分類してサブカテゴリーとした。さらにサブカテゴリーをカテゴリー化した。

## 7. 倫理的配慮

研究参加の依頼は強制力が働かないよう研究参加者募集のポスターを掲示し、自発的に応募した院生に以下のことを文書と口頭で説明し、同意を得た。説明内容は、研究の趣旨、研究参加は自由意志であること、参加に同意しない場合も大学院の教育評価に影響するなどの不利益は一切生じないこと、同意後の中断は随時可能であること、面接内容がどのようであっても成

績評価には影響しないこと、得られたデータは個人が特定されないように配慮し、研究目的以外には使用しないこと、研究結果は研究紀要で発表する予定であることなどである。

面接は第3者に内容が聞かれないよう個室であるゼミ室で行った。本研究は日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(研倫審委第2008-53)。

# III. 結 果

## 1. 研究参加者の概要

研究参加者3名の背景について表1に示す。年齢は2名が30代後半、1名は40代前半であった。看護職としての就業期間はいずれも10年以上を有していた。発展途上国に行った経験は2名は全くなく、1名は1回だけの渡航経験を有していた。

## 2. 分析結果

データを解釈・分析した結果、実習に参加した院生の体験から【カンボジアの現実を認識する】【カンボジアの医療や看護教育を批判的に見る】【異文化として承認する】【カンボジアの人々に対して尊敬の思いを抱く】【カンボジアの人々に親近感を抱く】【日本の医療の現状や自分の生き方を問い直す】【国際貢献への動機づけ】の7つのカテゴリーと20のサブカテゴリーが抽出された(表2)。以下に具体的内容を記述する。文中、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉、研究参加者の語りを「 」で示し、研究参加者個人はアルファベットで示した。

### 1) 【カンボジアの現実を認識する】

#### (1) 〈カンボジアの治安に対する緊張と不安〉

院生は初めての発展途上国ということで、とても緊張しながらカンボジアの首都プノンペンに到着した。プノンペンは首都であるにもかか

表1 研究参加者の背景

	年 齢	看護職就業期間	婚姻歴	子ども数	発展途上国への渡航経験
A	40代前半	20年以上	有り	2人	なし
B	30代後半	15～20年	なし	なし	なし
C	30代後半	10～15年	有り	2人	1回(短期間)

表2 大学院生の体験のカテゴリー・サブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
カンボジアの現実を認識する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カンボジアの治安に対する緊張と不安</li> <li>・カンボジアの悲惨な状況に衝撃を受ける</li> <li>・貧困と繁栄が混在するカンボジアの状況を直視する</li> </ul>
カンボジアの医療や看護教育を批判的にみる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現地の医療に対する批判の眼差し</li> <li>・現地の看護教育に対する批判の眼差し</li> </ul>
異文化として承認する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医療・看護教育における日本との違いはその国の文化であると納得する</li> <li>・カンボジアの文化の良いところを認める</li> </ul>
カンボジアの人々に対して尊敬の思いを抱く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カンボジアの医療や看護教育に携わる人々の熱意・努力・一生懸命さに感心する</li> <li>・カンボジアの一般の人々の生命力やたくましさを実感する</li> </ul>
カンボジアの人々に親近感を抱く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カンボジアの人々に親近感を抱く</li> <li>・コミュニケーションによってカンボジアの人々に親近感を抱く</li> </ul>
日本の医療の現状や自分の生き方を問い直す	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の医療に対する疑問</li> <li>・日本人である幸せを再認識する</li> <li>・行動変容する</li> <li>・自分の生き方を考える</li> </ul>
国際貢献への動機づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発展途上国への関心を深める</li> <li>・日本人の発展途上国での活躍を知る</li> <li>・国際協力として何かしたい・何が出来たかを考える</li> <li>・カンボジアの政治経済の問題を考える</li> <li>・語学力の必要性を実感する</li> </ul>

わらず未整備の場所が多く、このような状況の中で盗難や安全性は大丈夫なのかと不安を抱いていた。

「やっぱりすごい緊張していたかなという感じで。ものが盗られちゃうかも知れないという外国特有の思いとかで……」(A)

## (2) 〈カンボジアの悲惨な状況に衝撃を受ける〉

以前写真で見たプノンペンには整備されて綺麗な町並みというイメージであったが、実際には埃っぽくて建物は汚く、裏道に一步入ればバラックが立ち、雑然としてゴミが散乱している状況を見てショックを受けていた。またエイズ患者の家庭訪問では、患者やその子ども達の悲惨な状況を目の当たりにして、強い衝撃を受けていた。

「写真でしか見てなかったの、もっと綺麗な感じだったりとか整備された町並みというイメージが、プノンペンはそうなると思ってたんですね。だけど裏道に入ると結構雑然として、バラックがあったりとかして、首都だけじゃやっぱりまだそういうところが残ってるんだっていう思いが強くて、ちょっとびっくりして感じでした。」(A)

「(エイズ患者の家庭訪問で) 小さな3歳ぐらいの子どもが、お皿にご飯みたいなのが盛ってあったのを、野良猫と戦いながら食べているっていうのを一瞬見て、ほんとそれはもう胸が痛くて、野良猫と争ってご飯を食べなくちゃいけないこの子達の現実って、どう考えたらいいんだろうって思って。」(A)

「家庭訪問では、同じプノンペンでも(設備の整ったホテルの) 隣にはそういう家のない人がいるんだっていうのが、すごい私にはショックでしたね。」(B)

「エイズ感染して、(空き地に) ビニールシートで家を簡易的に造ったような所で暮らしている家族がいたんですけど、その家族ももう明日にはこの場を出ていかなければいけないかもってというような話を聞いたのがすごく衝撃的でした。」(C)

## (3) 〈貧困と繁栄が混在するカンボジアの状況を直視する〉

カンボジアの悲惨な状況を目の当たりにしてショックを受けていた院生達も、やがてその状況を冷静にとらえるとともに貧富の差を実感し、これが現在のカンボジアの動かしがたい現実で

あると認識するようになった。

「汚い川の中に牛と一緒に入って網をかけて魚を捕ったりとかしている人を見ると、感染とかもあるのかナーとか、実感というか、まあこれが本当の生活の人が多くいだろうなって思いましたね。」(B)

「野良猫を追い払いながらご飯を食べているっていう現実をちらっと見て、やっぱりすごい、一方ではね、川沿いの外国人通りなんてね、みんな楽しそうにしているのに、一方ではそういう現実があって。」(A)

## 2) 【カンボジアの医療や看護教育を批判的にみる】

### (1) 〈現地の医療に対する批判の眼差し〉

病院実習や医療施設の見学において、現地で行われている医療や看護を直接見学し、日本で行っていた看護と比較し、その場で言語化はしていないが無意識に批判的な目で見ていた。

「妊婦健診を見学していて、(ヘルスセンターの助産師が胎児の心音をドップラーで聴取している場面で) ドップラーちょっと聞けてない時もあったけど、まあいいやって感じでやってましたけど、臍帯雑音で拾えてないときもあるけどいいやと(ドップラーから聞こえてくる胎児心音が不明瞭で、臍帯雑音のような音が聞こえても意に介さずとりあえず胎児心拍らしきものが聞こえればよしとしていた)。ちょっとそれはねと思いました。」(A)

「国立母子センターとレッドクロスセンターが(規模や医療レベルは大きく違うのに) 同じなのは、家族はゆかにすわっているっていうのが……。まあ、そこまではまだ配慮がないのかなーと思ったのと、(大きくて整然としていて) そういう風に建ててもどれくらいの人がここに来れるのかなーとか……」(B)

### (2) 〈現地の看護教育に対する批判の眼差し〉

現地の看護学生の病院実習の状況を見て、無意識に日本の現状と比較し、実習内容そのものへの疑問や臨床指導体制が整っていないことに対して批判的にみていた。

「(実習に来た看護学生が) 実際にやらせてもら

ってたのはケアとか実践とかではなくて、カルテ張りだとかやっていたので、やっぱりスタッフとしては人手が足りないので仕事をやってもらってるって感じがして。うーん、実際ケアっていうのはまだまだ家族がやっていたし、その辺で(教育と臨床実習とに) ずれが出ちゃうかなっていうのを少し感じました。」(C)

## 3) 【異文化として承認する】

### (1) 〈医療・看護教育における日本との違いはその国の文化であると納得する〉

多少批判的に見ていた医療や教育について、現段階のカンボジアにおいてはそれも一つの文化であると自分なりに納得して認める姿勢も見られてきた。

「ケアとかも家族が一生懸命やっていて、あまり看護はスタッフがやるものではないんだなーという印象を受けた、(中略) 向こうの文化としては家族がやってるのかなーっていう風に感じました。」(C)

「病室では(褥婦の) 皆さん、親子で寝てたり、カーテンも何もなくってベッドがダーッと並んでましたけど、まあでも、向こうの文化は、カンボジアの本にも書いてあったんですけど、お家の人が付き添って看病するっていうのが基本なので、それがやっぱり踏襲されていて。」(A)

### (2) 〈カンボジアの文化の良いところを認める〉

批判だけでなく、昔の日本でもよく見られた家族のあり方や、医療が発達した日本では忘れ去られた技の伝承なども、この国では必要なこととしてきちんと受け継がれていることなどをみて、いいところは素直に認める姿勢も見られていた。

「小さい妹とかお姉さんとかが子どもの世話をするっていうのが伝統的に続いていて、それでまた子育てを覚えていくみたいなのところがあったりとかして。」(A)

「助産師の研修生に(妊婦健診において) 脚気の見方(膝外健反射) や全身状態をきちんと見るっていう昔ながらの診察をちゃんと教えてるっていうのがすごく印象的で、やっぱり全身見ないと何が起きてるか分からないっていう、(カンボジアの) 地方ではすごく大事なことで、大



事なことは実践をとおして教えていたのすごくおもしろかった。」(A)

#### 4)【カンボジアの人々に対して尊敬の思いを抱く】

##### (1)〈カンボジアの医療や看護教育に携わる人々の熱意・努力・一生懸命さに感心する〉

古い設備や旧式の医療機器を使いながらではあっても、人々の健康を守ろうと努力する病院関係者や研修生の努力や、看護の質の向上を目指して教育している教育者の熱意が伝わってきて尊敬の思いを抱くようになった。

「バライ村の助産師の研修生が泊まり込みで勉強してて、皆さんすごく一生懸命で、教科書なんか本当に薄いんですが、ほんとに一生懸命で、自分たちは(村に)帰ったら(村の人たちに)信用されて、村の健康を守るみたいなのがあって、そういうのがすごく印象的で……」(A)

「(病院の職員は)道具も何もなくて本当によく頑張っているなって思いました。」(A)

「医療技術学校の先生達も一生懸命で、これからの医療ってことで教えてる、その内容ってのもすごくすばらしいなあと思ったんですけど。」

(C)

##### (2)〈カンボジアの一般の人々の生命力やたくましさを実感する〉

現代の日本における妊産婦の体力低下や育児体験の不足などを日頃から感じていた院生は分娩室に入る直前まで病院の廊下を歩いていた産婦や、分娩直後からごく自然に授乳をする褥婦を見て生命力の強さやたくましさを実感していた。

「(分娩を見学して)すごく、やっぱり生命力というのかな、力強いなっていうのをすごく感じた。」(C)

「すごいたくましいなと思ったのは、(お産が終わって分娩室から陣痛室に戻ると)赤ちゃんにすぐ授乳を、こうするんだって言われなくても知っているかのように、当たり前のようにやってたことですね。」(C)

#### 5)【カンボジアの人々に親近感を抱く】

##### (1)〈カンボジアの人々に親近感を抱く〉

実習開始から数日が経過し、実習場の状況や滞在しているホテルのある地域の状況が大分理解出来ると当初の緊張感も減少し、その場所になじんできていた。

「外国人向けのスーパーとか連れて行ってもらったりとかして、あ、そういうことも出来るんだと新たな生活の仕方みたいなのが分かって。」(A)

「レッドクロスヘルスセンターは、(以前、日本の離島の病院に行ったことがあるので)なじんだ感じは自分でしてたんですね。何か特にギャップ感じないというか、病院の環境とか人の温かさとかは同じような感じだと思ってました。」

(B)

##### (2)〈コミュニケーションによってカンボジアの人々に親近感を抱く〉

カンボジア語はおろか英語でも十分に意思疎通が出来ない状況でも、互いに何とかコミュニケーションしようと努力する過程で相手のカンボジアの人々に親近感を抱くようになった。

「(お産に立ち会わせてもらったときに)スタッフの方が、なんて言うんですかね、英語でもないし日本語でもなく、カンボジア語なんだけど、それでも意思疎通は十分だし、一生懸命お互いにやっていて、(日本人は)私1人にその場はなってしまったんだけど、それはとても有意義な時間だったなって。」(B)

「お産に立ち会わせて頂いた産婦さんが、分娩台で診察をするときに、私が分娩室にいなかったら、手招きをして来て、来てって言われたのも、すごく近くなった感じがして、すごくよかったですね。」(B)

「(実習中の看護)学生さんもいて、話すのも英語なので非常に苦労しました。でも一生懸命向こうの方もいろいろ伝えようとしてくれるし、嫌な顔もあまりしないので、それはすごくありがたいなーと思いました。」(A)

#### 6)【日本の医療の現状や自分の生き方を問い直す】

##### (1)〈日本の医療に対する疑問〉

日本の医療現場においては当然とされていることがカンボジアでは実施されていない。しか

し、それが実施されなくても治療や看護に何の問題もなかったことから、それは本当に必要なことなのかと疑問を抱いた。

「(現地の看護場面を見ていると)なんて言うんだろ、なんか、自分が今までしてきたことって、うん(間)、必ずしも正しくないのかなっていうのを感じて、今まで当たり前にかう、やってきてしまったことをちょっとこう考えるようになりましてね、うーん。」(C)

「(カンボジアでは)エコーとか無くてもちゃんとみんな産んでたし、(分娩時には)ドップラーとか付けて無かったけどちゃんと産んでたしみたいなところがあって。」(A)

#### (2)〈日本人である幸せを再認識する〉

カンボジアの悲惨な状況にひきかえ、日本の豊かさや医療の受けやすさなどを改めて認識し、日本人である幸せを再認識していた。

「世界には、そういう国(勉強したくても出来ない国)があって、当たり前のように勉強が出来るここは本当に感謝しなくちゃいけないなと思ったり……」(A)

「日本では全部(健康)保険がきいていて、そこは日本のいいところなんだろうなーと思いますね。」(B)

「やっぱりもっと物を大切にしなければとか、(中略)与えられている環境がすごく幸せなのにそれに気づいてないなーって、すごいもったいないなーって思って。」(C)

#### (3)〈行動変容する〉

実習参加前はさほど感心がなかった発展途上国であったが、参加後は発展途上国の状況を踏まえて、職場の同僚や自分の子どもにアドバイスや注意をするようになった。

「(カンボジアに行く前は)自分の中では国際(貢献)より目の前のことが先って思いが結構あったんですね。だけどそうじゃなくて同時にやっていかないと、世界で起きていることが次に自分の目の前のことにも繋がってくるので。」(A)  
「海外で活躍したいって相談されたときに、私もカンボジアでこういう体験をしたから、いいんじゃないっていうふうに、能力と機会がある人は行ってみたらってことを本当に素直に言えるようになったので。」(A)

「(行く前は自分の子ども達が)もったいないこととしてるなって思っても、言わなかったですね。あんまり自分の中でもそれほど危機感がなかったっていうか、感じてる部分はあったけれど、それほど。行って帰ってきてからは、(子ども達がまだ使えるノートを捨てようとしたら)そんなもったいないことしちゃだめーって。そういうところはありますね。」(C)

#### (4)〈自分の生き方を考える〉

カンボジアでの実習体験から、これからの自分の生き方を根本的に考えようとする者、実習体験を今後の仕事にどのように生かしていこうかと模索する者、また当面の目標を達成してから改めて実習体験の意味を考えようとする者と、考える方向はそれぞれ異なるがこれからの自分の生き方を考えるきっかけになっている。

「本当に自分の幸せなこととか頑張るってことの意味とかってのを、改めて自分に問いかけてられているような感じがしたんですけど。」(A)

「(今回の実習体験を)現実の仕事にどう生かしていくかっていうのは難しいんだなっていうのは今感じてます。」(B)

「やっぱり最初のうちは自分が1人前になるのに必死だと思うんですね。で、ある程度自分に自信がついて、手技が身に付いて、自分のやっている助産っていうのは何だろうって考えられるようになった頃に、ああそいえばあそこでのっていうのが振り返られるんじゃないかなっていうふうに感じてます。」(C)

#### 7)【国際貢献への動機づけ】

##### (1)〈発展途上国への関心を深める〉

実習前は感心の薄かったカンボジアではあるが、実習後は関心が深まり、カンボジアに関連したテレビ番組などは自発的に見るようになった。またカンボジア一国にとどまらず、発展途上国全般へとその興味を広げている。

「何か興味はすごい湧いて、(テレビで)カンボジア特集とかあると必ず見るようにしてるんですけど。」(A)

「カンボジアのことについてはすごい興味があるようになりました。テレビとかで(放送が)あると、カンボジアに行った他のメンバーにメ

ールで伝えたりとかしますね。」(B)  
「カンボジアを基本にして他の途上国のことをイメージしたりとかするようになりました。」(B)

## (2) 〈日本人の発展途上国での活躍を知る〉

すでにカンボジアにおいて国際貢献している日本人の体験談を聞いたり、活躍している場面を目の当たりにして、国際貢献のおもしろさを理解していた。

「ジャイカの事務所は、日本人が頑張っているな—と思ったのと、やはり日本でもものだけを与えてオクケーにしている訳じゃなくて、もっと人を成長させていく、育成していくってところで頑張っているとこなんだな—と言うのが分かりましたね。」(B)

「ジャイカの方では日本人のスタッフが日本語を一生懸命教えてたりとかで、他の所よりも日本とカンボジアを繋げようって感じがすごく印象的でしたね。」(C)

「カンボジアでNPOとして活動している方と知り合いになって、その方達は(活動が)地域に密着しているので、そのこととかのお話を聞いたときに、それがまたおもしろかったです。」(B)

## (3) 〈国際協力として何かしたい・何が出来るかを考える〉

カンボジアの現状から発展途上国が国際協力が必要としていることを痛感し、またそのおもしろさを聞いて、自分も何か国際協力をしたい、今の自分に何が出来るのだろうと模索している。

「国際協力に関して、私のいるところで出来ることに関しては、積極的にやれることは、応援するっていうんじゃなくて自ら関わってやる何かって言うのを考えていきたいな—っていう感じ。(実際に国際協力を)するチャンスがあったらしたいな—というふうに思ったりとか」(A)

「本当に今回期待してたことはNGOとかに入って仕事が出来たらいいな—っていうのが一番だったんですけど、やっぱりこのくらいの経験だけだと受け入れがたいのかな—っていう現実の壁に当たって。(中略)(そのためには練習として)赤十字ヘルスセンターでもいいし、行って来る

だけでも、ボランティアをやってくるとかしたいな。」(B)

## (4) 〈カンボジアの政治経済の問題を考える〉

カンボジアの悲惨な状況を改善するためには、現場レベルの国際協力のみでは限界があり、政治・経済などの根本からの立て直しが必要であることを実感している。

「家庭訪問ではある程度は想像していったけれども、それ以上にひどい状況だったので、胸が詰まる思いというか、こういう状況で何か手伝ってあげられることはないのかな—って思ったときに、やっぱり政治経済の部分から、根本的なところから立て直していかないと改善されていかないのかな—って。」(C)

## (5) 〈語学力の必要性を実感する〉

国際協力を実践するためには基本的能力として語学力が重要であることを実感し、まずは語学力を習得するために行動を起こそうとしている。

「やっぱり自分の語学力のなさを感じて、やっぱり世界で話しをするとなると英語が出来ないとだめだな—っていうのを感じて、もっと自分で英語を勉強しようかな—って思って。」(C)

「また英語を勉強しなくちゃって思って、でもまだ全然行動にはしてないんですけど、それはちょっと思うようになってますので。」(A)

# IV. 考 察

丹野らは(丹野・齋藤・石原, 2007; 丹野・瀬倉, 2010) 発展途上国への国際看護研修における学習成果の報告書において、学生の学びとして現地における看護からの学びとともにコミュニケーションの必要性の痛感や多種多様の価値観の受容・尊重など異文化理解や異文化コミュニケーションにおける学びをあげている。また矢嶋らも(矢嶋・矢島・梅林, 2008) 看護短大生のカンボジア・タイでの国際保健活動論実習における実習目標の1つに「異文化間コミュニケーションを通して、文化を理解する必要性が理解出来る」をかかげ、それに対して参加学生達が多く of 具体的学びをしていると報告している。本研究においても、院生は実習当初は異



文化において行われている現地の医療や看護教育を批判的に見ていたが、実習が進むに連れて日本との違いはその国の文化であると異文化として承認していった。また現地の人々とのコミュニケーションを通してその人々に親近感を抱くなどの異文化理解や異文化コミュニケーションにおける学びをしていた。

海外研修であれば異文化体験は必然の事柄ではあるが、ここでは看護職としての豊富な経験を持つ院生が医療現場においてどのような異文化体験をしたのかに焦点を当てて考察する。さらに実習後の体験についても考察する。

## 1. 医療現場における異文化体験

院生は初めて発展途上国の医療、特に妊娠・出産を中心とした周産期の医療に直に触れて、日頃自分が日本の医療現場で実践していることとの違いを感じ、カンボジアの医療に対して批判的な見方をしていた。日本人は一般に欧米文化を高く評価し、近隣アジアの発展途上国の文化を低く評価するという「異文化に対するタテの態度」を持ちがちである(石井, 2001, p.8)といわれているように実習第1～2日目の時点では院生の気持ちの中に無意識にこのような態度が反映されていたと考えられる。しかし3日目、4日目と日を経るにしたがって、これらの違いは上下の差ではなく文化の違いによるものであると自然に受け入れるようになっていった。戸塚(1999)は国際看護と異文化看護の違いについてアメリカの看護教育者リディア・デサンティス(Ledia DeSantis)が示した「国際看護はマクロレベル、異文化看護はミクロレベル」をベースにして「異文化看護の実践には自分の文化尺度の生活規範や価値観は一時脇へ置き、相手の文化尺度で考えた看護が必要であり、そうすることで自分のものとは異なる文化を持つ人のニーズを認識出来るのである。」と述べている。なお、リディア・デサンティスは国際看護を「自分の者とは異なる国(独立国として認定されていない地域も含む)でその国の社会、政治、経済、教育、文化保健医療システム、疾病構造など看護に影響を与えるあらゆるものを考慮して適用する看護」と定義している。この時点で

の院生の態度はまさに異文化看護の視点に他ならない。

その一方で、カンボジアの悲惨な状況を改善するために何が出来ると考えた際に、単に医療や物資を提供するだけでなく、政治経済などの根本的なことから立て直していかなければ改善されないという発言から、マクロレベルすなわち国際看護の視点をも持ってカンボジアの医療現場を体験していたことがわかる。

このように今まで発展途上国の医療にほとんど触れた経験のない院生が、異文化看護の視点と国際看護の視点で発展途上国の医療をとらえることが出来た背景には本学の大学院修士課程国際保健助産学専攻の授業科目である「国際保健学」、「異文化論」、「国際赤十字助産活動論」などにおける学習が大いに役立っているものと考えられる。「国際保健学」では国際保健助産の概念や国際保健学的な視点で助産活動を展開するための基礎的知識を学び、「異文化論」では文化の概念、文化理解の方法を知り、自分の文化とは異なる文化やその文化を持つ人々を理解する方法を学び、「国際赤十字助産活動論」では開発協力における保健助産活動の方法論を学ぶなどしており、これらの知識を統合することによってこのような体験につながったものと考えられる。

## 2. 国際保健助産学実習Ⅰがもたらしたもの

本研究参加者3名は実習前は発展途上国に対してそれほど強い関心を持っていた訳でもなく、発展途上国への渡航の体験もほとんど無かった。しかし、カンボジアでの実習体験を通してカンボジア、さらには発展途上国への関心を深めていた。さらに実習終了後7か月が経過した時点においてもその関心は持続し、何らかの形で国際貢献したいとの思いに結実していた。

国際看護学も最終的に目指すところは「国際保健・看護の人材育成」であり、そのためには開発途上国における「国際看護学研修」は重要である(松山, 2008)と言われている。本実習も参加学生の国際貢献への動機づけとなり、本学の修士課程国際保健助産学専攻の設立目的である「赤十字の実施する国際貢献に役立つ人材

の育成」にも繋がっており、一定の効果を上げていると考える。しかし、3名とも「国際貢献したい」との意志はあるものの具体的にはどのようにアプローチすればよいのか模索している段階である。したがって、実習終了後に国際貢献への動機をさらに強化し、具体的行動化に繋がるような授業科目が展開されることが望ましいと考える。それにより、国際保健助産学実習が単に国際貢献への動機づけに終わるのではなく、国際貢献に役立つ人材の育成に繋がっていくものとする。

## V. 結 論

1. 大学院生の国際保健助産学実習における体験として【カンボジアの現実を認識する】【カンボジアの医療や看護教育を批判的にみる】【異文化として承認する】【カンボジアの人々に対して尊敬の思いを抱く】【カンボジアの人々に親近感を抱く】【日本の医療の現状や自分の生き方を問い直す】【国際貢献への動機づけ】の7つが抽出された。
2. カンボジアの医療現場の実習においては異文化看護と国際看護の2つの視点からカンボジアの医療をとらえることができていた。
3. 本実習を終了した院生は国際貢献への意欲を表明していたが、まだ行動化には至らず具体的なアプローチの方法を模索している段階である。実習終了後に国際貢献への動機をさらに強化し、具体的行動化に繋がるような授業科目が展開されることが望ましいと考える。

## VI. 本研究の限界

本研究の参加者は大学院修士課程国際保健助産学専攻の学生で臨床経験も豊富であるが、3名の内2名は今回の実習に参加する以前には発

展途上国の医療に触れたことはなく、また残りの1名も1回だけ短期間の渡航経験があるにすぎない人たちである。したがって、本研究の結果は発展途上国の医療をほぼ初めて体験した人に限られており、何度も発展途上国での医療を体験している院生の場合、結果は異なることが予想される。

## 謝 辞

本研究を行うにあたりご協力頂きました研究参加者の皆様に心から感謝申し上げます。尚、本研究は平成20年度日本赤十字看護大学伊藤・有馬記念基金の助成を受けて実施いたしました。

## 文 献

- 石井敏(2001). 文化に上下や優劣はない—文化相対論. 古田暁・石井敏・岡部朗一・平井一弘・久米昭元, 異文化コミュニケーションキーワード 新版, (pp.8-9). 有斐閣双書.
- 松山章子(2008). 学問と実践を繋ぐ試み. 国際保健医療, 23(2), 90.
- 丹野かほる・齋藤君枝・石原清(2007). ミャンマーにおける国際看護研修とその学習効果. 新潟大学医学部保健学科紀要, 8(3), 143-150.
- 丹野かほる・瀬倉幸子(2010). ラオス国際看護学研修の学習成果と効果的な海外研修のあり方の検討. 日本看護学会論文集: 看護教育, 40, 269-271.
- 戸塚規子(1999). 国際看護と異文化看護. 国際看護研究会編, 国際看護学入門所収(pp.9-15). 医学書院.
- 矢嶋和江・矢島まさえ・梅林圭子(2004). 国際保健活動論実習における学生の学びと今後の課題. 群馬パース学園短期大学紀要, 6(1), 73-84.